講評文

12月25日　　2番目

啓新高校

「残郷」

何気ない日常から物語が始まり、主人公たちが通う中学校の廃校の危機が知らされることで、物語が大きく動き出します。廃校を食い止めるために奮闘するものの、結局止めることはできず、そのことをきっかけに生徒たちの想いはすれ違ってしまいます。これまで当たり前だった日常が突然失われてしまうという展開から、「当たり前」はいつか無くなってしまうかもしれないこと、そしてそれを失ったときにどう生きていくのかについて考えさせられました。また、過疎化や少子高齢化といった現代社会が抱える問題にも触れており、深いテーマ性を感じました。

最後の灯籠流しの演出もとても美しく、観劇後も余韻に浸っていました。ただ、それまで川に関する描写が少なかったため、急に灯籠流しを川で行う話になったことに少し不自然さを感じました。四葉中学校の近くに、皆がよく行っていた川があるという設定をセリフに加えると、より自然になるのではないかと思いました。

技術面でも、細かい練習を重ねてきたことが伝わってきました。キャストの役の入り込みには本当に感動しました。高校生が中学生を演じるのは難しいはずですが、中学生の幼さが上手に表現されていました。おばあちゃんや先生の演技も素晴らしく、高校生が演じているとは思えない程でした。音響では音量の調整が工夫されており、さりげない効果音によって違和感なく物語に入り込むことができました。照明では、最後の青ホリによるシルエットの演出がとても印象的で、それぞれが違う場所で生きていくことになっても、人の想いは変わらず故郷にあることを表しているように感じました。舞台美術では、教室の窓をすりガラスにすることで、こうたとさきが教室の外で怒られている様子が分かりやすく表現されていました。また、先生がロッカーの中から出てくる演出もとても面白く、アイデア力にも感動しました。

「当たり前」の日常が失われてしまっても、前向きに生きていこうとするこうたたちの姿に勇気をもらいました。日々の生活をもっと大切にして生きていこうと、この劇を観て感じました。心温まる素敵な作品をありがとうございました。啓新高校の皆さん、お疲れ様でした。